

〈シンポジウムを受けて〉

「全カリ(教養)と専門の統合」?

— 一教員の私的見解 —

斎藤松三郎

— 時代状況の私的理解 —

ローベルト・ムージル(1880-1942)の記述をもとに、ほぼ一世紀前のヨーロッパの状況をごく簡単に眺めてみよう。十九世紀後半のヨーロッパは商工業と学問・研究においてすぐれた成果をあげた反面、当時の文明エネルギーの焦点から外れた活動領域ではすべてが沈滞していた。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、詩人や批評家、宗教家や女性たちが不満の声をあげはじめ、純粋な知識などというものは人間の高雅な能力をずたずたに引き裂いてしまう禍いであるなどという発言を繰り返すようになる。そして彼らは人類の新しい信仰とか内的原始状態への復帰とか、愛や人道主義による救済などを要求する。

さて、時代はそのあと二度の世界大戦を経験してほぼ百年経過した。極東に位置する日本はそのあいだに社会・教育制度を変革しつつ大量の知識を欧米から習得し、それらを応用したり新たな知を開発しながら文明国に仲間入りして、経済・技術大国へと飛躍的な発展を遂げている。しかし日本の社会

状況に目を移してみると、教養や正義や倫理観といったものの存在を疑わせるような種々の問題や事件が発生し、「高学歴・無教養」と呼べるような社会が到来している。だからと言って、成長期に科学的・実証的な知から多大な利益を受け、さらに今後も知の恩恵に浴したいと考えている日本は、一世紀前の西欧とは違って、客観的真理の〈没価値的〉研究や追求の方向性を糾弾するわけではない。なぜなら、理性的に判断をくだす人びとは、真理や知識そのものが「諸刃の剣」であり、一方では大変な利益をもたらすものの、他分野放しにしておくと人間の公共性や人類の幸福に大きな害をもたらすことを知悉しているからである。おそらくそうした脈絡から『大学審議会』は、今後の教育が没価値的・客観的な知を操作する人間に「教養」を施して「さまざまな角度から物事を見る能力」を養い、「幅広い視野」に立って「柔軟かつ総合的」で「的確な判断」が下せるような「豊かな人間性」を育成するならば、科学文明に付随する非常識な諸問題は解決できると考えたのではないだろうか。従って現在の日本は一

方でこれまでの能率至上主義をさらに推進しながら専門知識による技術・経済の拡大や強化を計りつつ、他方で「全人的」教養教育の必要性を緊急な課題として掲げるのである。一世紀前のヨーロッパの状況と変わらないのは、科学的知識と倫理・人道の乖離、合理的精神の目指す方向と幸せを求める人間の感情の方向性のギャップ、つまり統一体としてあるべき人間の生が分裂していることである。そしてその分裂は一世紀前の状況よりもはるかに顕著で、人類の幸福や生存を危機に追いやるまでになっている。しかし一世紀前と大いに異なるのは、あくまでも「幅広い」知的「教養」によって時代の弊害を克服しようとしている点である。『最終答申』のなかの教養教育の必要性に関する論理展開について別段異存はないし、またその教養理念も古典的で漠然としているため異論の立てようもないが、しかし『答申』は合理的・能率主義の時代趨勢をそのまま反映していて、「教養教育と専門教育の有機的連携の確保」を謳っている。そして立教大学も同じように「全カリと専門の総合ないし統合」を目指しているのである。この紙面ではその問題点や教養と専門のあるべき関係について私なりの見解を原則(?)に即して述べたいと思う。

—教学についての素朴な解釈—

人間の精神的な営みや努力の大部分

は、自然や社会、文化や人間一般を対象化してその理解を目指していると言えよう。そして本来学問・研究に携わる者の目標でもあり「幸福」ともなるのは、さまざまな対象の仕組みや構造についての知を主観的なものにとどめることなく、客観的な認識まで高めることであり、それと同時に知の生産によってほかの人びとに恩恵をもたらすことであろう。

社会生活を送りながら学習や研究をはじめめる者は、さまざまな知や研究成果を学びながら知的関心を広げていくし、またその必要があるだろう。なぜなら、関心を広げることによって世界や社会や人間に対する理解の仕方や処し方も拡大され、想像力も養われていくからである。そして系統だったさまざまな知的成果を理解する過程で、知の生産の前提となっている理解や解釈の技術・方法も納得していくことになる。そんな風に知の教育が機能するならば、学習者や研究者は、あらゆる領域の事象を含んだ社会生活のなかでいろいろな事態に遭遇したとき、知を活用したり、あるいは知が役に立たなければ習得した技術を用いながら新たな知を開拓したり、さらには対象への新たなアプローチを発見しながら知的に対処することだろう。

生活体験や知の理解を通して培われた想像力は、少なくとも相当量の知識と技術の蓄積があって初めて生産的に機能しはじめ、主体的な判断を下したり、新たな知を発見する際に役立って

くる。正確な知識や規則だった方法の裏打ちがなければ想像力は無力同然で、せいぜい無意味で支離滅裂なビジョンを描き出すにすぎない。また、想像力はなにかの固定的観念にとらわれていたり、偏向した知識や自分勝手な方法に基づいていると、生産的な創造活動が出来ないだけでなく、かえって有害な結果をもたらすことにもなる。

—教養科目と専門科目の有機的連携?—

立教大学の専門学部の使命は、入学した学部で優れた「専門家」を育てると同時に「良識のある社会人」ないし「主体性のある市民」を育成することである。教育に関して「教養(全カリ)」と「専門」という別々の表現を用いるとき、それぞれの教育方針の目標はどこにあるか、一目瞭然であろう。「全カリと専門の統合」という本題に入るために、ここで教養の理念と専門の目標について簡単に考えてみたい。

学問研究は正確な知の獲得を目指してさまざまな分野や部門に細分化・専門化される運命にあったし、今後もその傾向はますます強まるだろう。しかしそうした傾向に対立するかのようによい教養教育は、人間と他者の関係、社会や世界の構造、さらには人間と社会をとりまく自然の仕組みなどについてさまざまな領域の基本的枠組みを教えようとする。そして細分化された多様な知を基礎のレベルで網羅し、あらためて総合しながら人間の精神活動の全体

の見取り図を可能なかぎり理解させ、学生たちに「知の全体」や「全人間性」に近い素養を育もうとするのである。なぜなら、教養によって培われた「幅広い視野」があって初めてそれぞれの専門は「タコつば」にはまり込むことなく、精神活動の総体的視野、しいては人間の「全体性」に立って、自己の意味を客観化し問い直すことが出来るからである。専門学には視野を狭く限定し、深く掘り下げて考える方が面白いが出てきて、興味がさらにそそられるという一面があるため、ともすれば専門は視野が狭くなりがちである。そのうえ専門教育は当然のことながら、専門分野の基礎知識や理論や方法論を習得・理解させることによって実用・有用性を目指している。いささか語弊のある比喻表現になるかも知れないが、実用・有用を志向するかぎり、専門学には悪徳商人の精神に近似したものが必然的に内在していると言えよう。悪しき商人は一途に自己の目的追求をめざし、能率の向上に励み、右顧左眊することなく道徳的配慮を排除し、不確かな方法には不信感を抱いて「量と数」を尊重し、狙った獲物を確実に手に入れ、自分にとって実り豊かな成果・業績を達成しようとするのである。そのためうっかりすると、大学人は専門教育を介して意図しないうちにそうした精神性を養うことにもなりかねないのである。とは言っても、私はなにも専門教育の価値を否定しているのではなく、情熱的で力強い専門学

の発展によって人間の精神・物質の両面世界がさらに豊かになることを望んでいるのである。ひょっとして以上のような私の論理展開に憤りを覚えられ方がおられるかも知れないが、しかしそれが私の率直な感想であり、たとえこの感想が思い違いであるにしても、この私的見解は、科学・実証万能に偏向した時代思潮に晒され、その流れに呑み込まれてしまう危険性のある専門学が背負わざるを得ない運命をいくらか言いあてているのではないだろうか。かりに悪しき商人的精神が専門学のなかに内在していたり、あるいは時代状況のなかで専門学が否応なく商人精神に呑み込まれてしまうのであれば、その事実を専門学自身が客観化して問い直し、問題が起こらないように配慮する手だてとして最低限の教養が不可欠になってくるのである。

教養の理念の方向は、専門基礎知識の理解および細分化された分野での早急な深化を志向する専門科目とはまったく異なるのであって、双方の教育を「ごた混ぜ」にして一元的にまとめようとするれば、時代の趨勢のために教養は専門の下請けになってしまい、教養の理念は完全に崩壊してしまうだろう。「全カリ」と「専門」を統合して全カリを専門のなかに組み込むよりも、教養と専門の両輪体制の新たなあり方を考え、一方では必要最小限の規模を保ちながら現代に適した教養教育を確立し、他方では専門教育を見直して充実化を計るべきだろう。それが現

代という時代状況が大学教育に課している問題である。現代という時代が陥っている生の分裂を強引なやり方で糊塗して表面をとり繕うよりも、その分裂を受け入れたうえで慎重な対応を考えることが肝要なのである。

—教養と専門のあるべき関係—

立教大学で現代風の教養教育を新たに確立するためには、大部分の学生が三教科入試で入学し、受験技術という方法しかほとんど知っていないという事実を前提に据える必要があるだろう。従って人間の精神活動の全体的見取り図をおおまかに構成できるような教養基幹科目を設定し、それを単なる知識としてではなく、人間の実生活や人間の精神活動に関連あるものとしてヴィヴィッドに理解させる工夫が必要である。最近のカリキュラムを見てみると、ともすれば社会・文化現象の多様性に目を注ぐあまり、流行のテーマを取りあげて「総合科目」が展開されているが、しかしそれを受講している大部分の学生には精神活動の全体的見取り図も学問的な基礎的知識もほとんど欠落しているのである。ひょっとして学生たちは自分が何の学問を、つまりいかなる知の基本的枠組みを学んでいるか分からなくなったり、あるいはテーマが異なると、これまでの知が応用できず、対処の仕方にとまどうのではないだろうか。時代の重要な諸問題をテーマにして展開される「総合科目」はA群にしるB群にしる知の「応用」が

含まれているため、いくらか学問の基礎が整った学生を対象にする方が良いのではないだろうか。

立教大学では全カリが実施されて以来、教養科目の単位が減少して専門科目の単位および時間数が増えている。従って専門基礎の教育は専門科目編成の見直しを行いつつ充実を図ればいいのである。専門教育にとって教養科目はある部分で役に立ち、ある部分は離反していくものであって、それぞれの専門が覇権を握ろうとしないかぎり、それでいいのではないだろうか。なぜ

なら教養は、いわば慌てふためいて歩んで行く専門に対して「おい、ちょっと待てよ。おかしいじゃないか。おまえはどこに進もうとしているんだ。おまえのしていることは人間や社会にとってどんな意味があるんだ。純粋な気持ちでやっているつもりだろうが、しかしおまえがかりに流用された場合はどうなるんだ」などと声をかけ、一旦立ち止まって少し考えてみることを促す役目を担っているのだから。

(さいとう まつさぶろう

本学観光学部教授)